

年間第二十五主日

ルカ 16・1-13

2019.9.22

高円寺教会 18:30 ミサ  
松本勝男神父（神言会）

今日の福音は、ルカ福音書 16 章の不正な管理人のたとえ話です。不正を働いた管理人が、主人から首にされても自分を家に迎え入れてくれるような者たちを作ろうと、彼らが主人に対して抱えている借りを記してある証文を書き換えさせて、恩を売ったということです。

果たして聖書にこんなお話を載せてもいいんだらうかを感じる人もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、お話としては面白いお話ではないでしょうか。イエス様が活躍されていた 2 千年前は、今のようにテレビとかインターネットのような娯楽はなかったわけで、イエス様がなさるたとえ話に娯楽的な要素があっても不思議ではないと思うのです。きっとイエス様ご自身も、たとえ話をなさるときは、学校の授業と同じで、聞いている人たちをどうやって惹き付けようか、そういう思いでストーリーの展開を考えておられたのではないのでしょうか。

おそらく、今日のイエス様のたとえ話の中でポイントになる部分は、「不正にまみれた富で友達をつくりなさい」というくだりではないかと思うのです。『聖書と典礼』の解説にも記されているように、「不正にまみれた富」というのは、「不当な手段で得た富」ではなく、「この世の富」という意味です。「この世の富」は、人間の欲望を増幅させ、不正な目的に使われるリスクもあるけれども、神様を喜ばせ人々を喜ばせるためにも使うことができるのだから、是非ともそうしなさいというメッセージを読み取ることができるように思います。

管理人が借りを記してある証文を書き換えさせたということについては、文書偽造の罪に問われるのではないかという気がしますがけれども、『聖書と典礼』の解説にも記されているように、もともと証文に記されていた数値に不当な利息がかけられていたという根本的な問題があったということです。ユダヤ教の立場では、仲間から利子を取ったり手数料を取ったりするのは神の律法によって禁止されていました。これは、レビ記の 25 章 36 節から 37 節とか、あるいは出エジプト記 22 章 24 節に出てまいります。だから、不正を働いた管理人が証文を書き換えさせたということは、不当とされる利息や手数料を差し引いただけの話です。自分の取り分を削っただけなんです。主人に対しては何の損害も

与えていないし、証文を書き換えさせた人たちにも喜んでもらうことができました。そして、このような抜け目のない管理人のやり方を主人はほめるわけなんです。

これを踏まえて、福音の後半でイエス様はこうおっしゃっています。「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である」、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」。

いかがでしょうか。使い方を間違えると罪作りの原因となるこの世の富だからこそ、この富を神様のために、人のために使うすべを知っている人に対し、神様はより大きな仕事を任せてくださるということなのではないでしょうか。それは、この世の富よりもはるかに価値のある不動なもの、確かなもの、堅固なもの、つまり、本当に価値あるものの管理を神様にまかせていただけるということなんです。そのような人は、欲に目がくらむことはないから、神様を喜ばせ、人を喜ばせるために、この世の富を使うことができるし、神様に仕えるか、富に仕えるか、迷うようなことはないわけです。

来週の日曜日は、「世界難民移住移動者の日」で、教区の特別献金が行われます。「宇宙船地球号」とか「地球家族」という言葉を聞くようになって久しいですけれども、本当に人種国籍の違いを超えて、地球に暮らすわたしたち一人ひとりが家族であるということ、しかも神様に結ばれた一つの家族であるという意識を持つことが大切だと思います。

家族の中で困っている人、苦しんでいる人がいたら、助けてあげるのは当たり前のことです。経済大国と呼ばれる日本で暮らすわたしたちも、決して生活は楽ではないかもしれないけれども、おそらく難民を生み出している国々と比べたらまだまだ生活は恵まれているんだろうと思います。「同じ地球の中であって、裕福な人とそうでない人がいる。それでは、わたしたちは、自分に与えられているこの豊かさを何のために使っていったらいいのか」—「世界難民移住移動者の日」は、このようなことを考える大切なきっかけとなる日ではないでしょうか。

今日の福音では、不正な管理人のたとえ話が出てまいりましたがけれども、どうぞここに集うわたしたち一人ひとりもまた神様を喜ばせ、人々を喜ばせるために、この世の富を使うことができるよう、恵みを願いながら、今日のミサを続けていきたいと思います。しばらく黙想いたしましょう。